

高齢患者の泌尿器疾患を診る 転ばぬ先の薬と手術

企画にあたって

かつてはわが国においても欧米各国と同様、高齢者は65歳以上と定義されていました。しかし2017年に、「高齢者の定義と区分に関する日本老年学会・日本老年医学会高齢者に関する定義検討ワーキンググループ」から、従来高齢者とされてきた65歳以上の人でも、心身の健康が保たれており活発な社会活動が可能な人が大多数を占めているという調査結果により、65歳から74歳を准高齢者、75歳から89歳を高齢者、90歳以上を超高齢者とするという提言がなされました。

寿命が長くなれば長くなるほど、泌尿器疾患に罹患する確率が高くなります。私が医師になった頃に比べて、いわゆる高齢者や超高齢者の治療に携わる機会がかなり増えたと実感しています。「活発な社会活動が可能」とはいえ、薬物治療を行ううえで有害事象の発症率が高く、特に併存疾患を有する場合は手術適応や手術方法の選択には頭を悩ませる機会が少なくありません。そのような高齢者や超高齢者に対してどのように私たち泌尿器科医が対処すべきか、意外とまとまった教科書や雑誌の特集はこれまでありませんでした。そこで今回、皆様のご期待に応えるべく、「高齢患者の泌尿器疾患を診る—転ばぬ先の薬と手術」というタイトルで、特集を組ませていただきました。

本誌2019年6月号では、「メディカルスタッフとともに診る 高齢者の排尿マネジメント」という特集を企画させていただきましたが、今回は老年泌尿器科特集の第2弾です。前号は“フレイル”“サルコペニア”をキーワードに、特に要介護者の排尿管理をテーマにした特集でしたが、本号は高齢者に対する泌尿器癌、下部尿路機能障害、尿路感染症、尿路結石の薬物治療と手術をテーマにした特集です。ぜひともお手に取ってご覧いただき、明日からの高齢者診療に役立てていただければ幸いです。

福島県立医科大学医学部
泌尿器科学講座

小島 祥敬